

ルカ 24 章 1-12 節 「途方に暮れた朝」

イースターおめでとうございます。キリスト教信仰の中心は、ナザレのイエスの十字架と復活にあります。イエスさまが十字架で殺されたけれども、よみがえったということを感じているからこそ、明日を生きる力が与えられるのです。そのキリストの復活を最初に証言したのは、女性たちでした。このことは四つの福音書すべてに共通しています。女性たちが第一証言者であることは、ほぼ間違いないでしょう。福音書を比べると、主イエスの受難、十字架については、どの福音書も同じような共通の記述がなされています。しかし復活については、それぞれの福音書の受け止め方、見解が至る所にちりばめられています。「復活」の出来事についての目撃者証言は、ルカは「途方に暮れて」と書かれています。主イエスの亡骸を収めたはずの墓が、空であることを見た女たちは、「途方に暮れた」のです。

女性たちが途方に暮れた原因は、「主イエスの遺体が見当たらなかった」から。彼女らは、愛する主イエスが十字架につけられて殺されてしまった言い様のない悲しみ、嘆き、絶望の中で、安息日を過ごしました。その絶望の中での唯一の慰め、希望は、安息日が明けたらお墓へ行って、主イエスの遺体ともう一度対面し、丁寧に香料を塗ってさしあげること、主イエスへの最後の奉仕、だったのでしょう。だから、夜明けと共に、墓へと急いでやって来たのです。それなのに、そこにあるはずの主イエスの遺体が見つからない。主イエスの遺体がどこへ行ってしまったのか分からない、それは彼女たちにとって、絶望のさらに絶望を塗り重ねられるような出来事で、「途方に暮れた」のです。イースターの朝は、この婦人たちが絶望の中で「途方に暮れた」ことから始まりました。

そんな途方に暮れている婦人たちの傍らに、天使が現れ伝えます。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」。あなたがたは主イエスを捜しているが、捜す所が間違っている。「あの方は、ここにはおられない」。なぜなら主イエスは復活して生きておられるからだ、そう天使は告げたのです。これは、主イエスの復活を告げる喜ばしい知らせです。けれどもこの知らせを聞いた彼女たちは、ある意味でますます途方に暮れてしまいます。主イエスの死という絶望・悲しみの中に、主イエスの遺体に奉仕するという一つの慰めを、せめてもの喜びを見出していたのです。しかし遺体がない。慰めすら行うことができない絶望です。

さらに天使の言葉が続きます。「まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい」と。主イエスのご自分が捕えられ、殺され、三日目に復活することを予告していました。天使の言葉から「婦人たちはイエスの言葉を思い出しました。けれども彼女たちが、主イエスの復活の喜びに満たされたのか」といって、微妙です。彼女たちが喜んだとは語られていません。果して彼女たちは、主イエスの復活を信じていたのか、主は復活して今も生きておられる、という喜びに満たされていたのか、それは微妙です。

彼女たちがこの時どう思っていたかは実は問題ではありません。それは、むしろ私たちの問題なのです。私たちは今、この婦人たちと同じ状況にいるのです。主イエスは復活して今も生きておられる、教会はそのことを告げ知らせています。教会がこうして日曜日に礼拝を守っているのは、このイースターの日曜日、つまり週の初めの日に主イエスが復活なさったことを記念しているからです。私たちは教会の礼拝において毎週、主イエスの十字架の死と、そして復活によって神様が私たちのための救いのみ業を成し遂げて下さったことを聞いています。み言葉を聞いた私たちがどうするのか、主イエスの復活を信じて、その十字架の死と復活によって神様が与えて下さる救いをいただいてその喜びにあずかっていくのか。それともなお途方に暮れるのか。そのことが私たち一人一人に問われているのです。私たちの罪の赦しのために十字架の苦しみと死を引き受けて下さり、そして復活して今も生きておられる主イエスが出会って下さることを信じて祈り求めたいと願います。